
天装戦隊ゴセイジャーA's ～エピックオンリリカル～

宇宙ひらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天装戦隊ゴセイジャーA's 〜エピックオンリリカル〜

【Nコード】

N8675U

【作者名】

宇宙ひらめ

【あらすじ】

申し訳ございません書き直し中です。

現在此处は突貫工事中（書き直し中）です。

12月以内に天装戦隊ゴセイジャー作品となります。申し訳ございません。

最初に・注意書き

はじめに・注意書き

ひらめの駄作製造所へようこそ。

以下の注意点参照。いろいろ注意して、お読みください。

- ・ この作品はスーパー戦隊35周年&仮面ライダー40周年を記念して、制作した仮面ライダーです。
- ・ 作者は中二病を患っています。
- ・ 他作品同様、独自解釈、独自設定アリです。作者の勘違い、公式設定等を教えていただけるのは大歓迎です。ですがそれでお話を修正するかという程度によります。修正がない場合はこのSSの仕様です。
- ・ ちなみに作者は一部の特撮しか知りません。ザボーガー？バロム1？ 何それ美味しいの？
- ・ バトル以外にも暴力描写あります。出来るだけ薄めるので年齢制限はかけません。

では宜しければ、お付き合いよろしく願います。

追記、物書きドベです。誤字脱字があれば教えてください。

ブログ

6月3日 PM9:05 海鳴市 中丘町

はやては留守電のメッセージを再生する

「留守電メッセージ一件です」

「もしもし、海鳴大学病院の石田です。えっと、明日ははやてちゃんのお誕生日よね。明日の検査の後、お食事でもどうかと思ってお電話しました。明日、病院に来る前にでもお返事くれたら嬉しいな。よろしくね」

「メッセージは以上です」

はやてはベッドで本を読んでいた

「あつ、もう12時」

闇の書が黒い光を放つ

「あつ！」

「封印を解除します」

「あつ」

「起動」

闇の書の封印が解けた

epic1 はじまりは突然に

12月1日 AM6:35 海鳴市 桜台

軽い金属を蹴るような音が木霊する早朝の公園に、九才程の少女が一人たたずんでいる。

ジューズの空き缶が空高く舞い上がるが、少女はそれに手を触れてなどいない。桜色に輝く光の玉が、弾丸のごとき速度で幾度となく空き缶を襲い、大空へと弾き上げているのだ。そばのベンチでは、そこに控えた紅い宝玉が、弾いた回数を正確に数えている。結論から言ってしまうえば、この弾丸は少女が作り出したモノであり、彼女はそれを手足のように操り、空き缶を『的』にした誘導操作の訓練をしているのだ。ちなみに、点滅を繰り返す宝玉は、魔法の構築を助力する『^{デバイス}機械』である。

弾き続けること百回、宝玉が少女に訓練の終了を告げると、彼女は肩の力を抜き、『的』を見上げ、

澄んだ声をその場に響かせ、人指し指を立てた拳を振り下ろす。

「ラストッ！」

ちょうど目の前まで落下してきた空き缶を、光の弾丸が勢いよく地面に水平に弾き飛ばす。どうやら、そばにあったゴミ箱に入れようとしたらしいが、フチに当たり、軽い金属音と共に土の上に転がってしまった。残念そうに肩を落とし、ため息をつく少女に宝玉が励ましと労いの言葉を掛ける。

「あーっ・・・」

「Don't mind, my master」

「ありがとう、レイジングハート」

このような光景を見た者は普通、奇妙な現象だと感じるだろう。しかし、彼女にとってはごくごく自然なことであり、日常的事ことなのだ。

今年の春に、彼女は『魔法』と出会った。偶然に偶然が重なって、異世界の少年と出会った事で手に入れた異世界の技術……。当初は『探し物の手伝い』程度であった繋がりだが、いつの間にか彼女がある大事件へと巻き込んだ。人呼んで『ジュエルシード事件』である。彼女達の『探し物』でもあった青い宝石が中核をなしたこの事件は、主犯であったプレシア・テストロッサの実質的な死亡と、その娘であり事実上の実行犯でもあった少女 フェイト・テストロッサの捕縛という形で幕を下ろした。

文字通り火花を散らせ幾度もまみえた少女達は、事件終結後強い絆を結び、お互いに良き友人となった。事件の重要参考人として遠い世界に行ってしまったため、今は会えない金色の長髪と赤い瞳が魅力的な少女を思い浮かべる。次元世界の秩序を守る組織『時空管理局』の執務官であるクロノによれば、なんとか無罪放免に出来そうだと、とのこと。嬉しい限りである。

何はともあれ、大切な親友達との再開に期待をよせ、頭の左右で結んだツインテールを揺らしながら、少女 高町なのはは帰路にいた。

「なのは、郵便が来てるぞ」

「ん、本当？」

「海外郵便。差出人、フェイト・テストロッサ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「いつものあの子だね。またビデオメール？」

「うん、きつとそう」

「その文通も、もう半年以上にもなるよな」

「フェイトちゃん、今度遊びに来てくれるのよね？うちに来てくれたら、お母さん、もううーんと歓迎しちゃう！」

「うん！」

「ユーノも本当の飼い主が見つかったちゃって、めっきり寂しいしね」

「お前は特にかわいがってたからな」

「えっと・・・でもまた預かることになるかもだよ。その飼い主さん次第」

「だといいな」

「ねえ」

「ねえお母さん、ユーノ私のこと覚えてる？」

「フエイトちゃん、ユーノ君、クロノ君にリンディさん、エイミィさん・・・みんな元気かな？」

同時刻、次元の狭間を渡る一つの巨大な影があった。

時空管理局艦船『アースラ』。『ジュエルシード事件』の際に捜査と対策の拠点となっていた次元航行船である。

その司令室では、緑色の長髪を高めに結わえた女性がスタッフ達に指示を出していた。

彼女の名はリンディ・ハラオウン。時空管理局の提督の地位にあり、アースラの艦長でもある。

「失礼します。艦長、お茶のおかわりいかがですか？」

そう言つて、茶髪を短めに切った女性が緑茶とお茶菓子のヨウカンを彼女に差し出す。

名をエイミィ・リミエッタ。時空管理局執務官補佐であり、優秀なオペレーターでもある。

丁寧にお礼の言葉を述べて、リンディは湯飲みを受け取る。

「本局にドッキングして、アースラも私達もやっと一休みね」
「ですね」

何気ない世間話でもするかのように言葉を交わす二人。彼女達の醸し出す穏やかな雰囲気は、とてもではないが、上官と部下のそれとは言いがたいモノがあった。

部下との会話を楽しみながら、リンディは手元にある金属製の小箱から角砂糖を数個取り出し、躊躇することなく次々とお茶のつがれた湯飲みへと投入していく。この提督、かなりの甘党のようだ。エ

イミイはすでに彼女の味覚に慣れているようで、ツツコムこともせず、笑顔で会話を続けているが、はたから見ると、ハッキリ言って気持ち悪い。

「子供達は？」

「今は休憩中のはずだよ。」

クロノ君とフェイトちゃん、さっきまで戦闘訓練してましたし、ユーノ君もそれに付き合っていましたから」

ふと思い出したかのようなリンディの質問に、その斜め後ろに控えたエイミイが答える。

「そう……。明日は裁判の最終日だっというのに・・・マイペー
スねエ・・・」

トドメにミルクまで入れたその液体をおいしそうに飲み、満足そうに息をつく。甘党もここまで来ると異常である。

ふと、小皿に並んだ二つのヨウカンが目に入り、その一つをエイミイに勧める。

「まあ、勝利確定の裁判ですから！」

ヨウカンを受け取り、エイミイはニツコリと笑ってみせるのだった。

クルー達が思い思いに羽を休めるカフェテリアの一角に彼等はいた。談笑する周りのメンバーと異なり、その四人は少々重い空気を纏っている。それもそのはず。訓練を終えた彼等は今、明日に迫った裁判の最終確認をしているのだ。黒髪の少年の説明に、残りの三

人、渦中の少女 フェイト、その使い魔 アルフ、なのはに魔法を授けた張本人である少年 ユーノが頷く。

この三人をまとめている少年の名は、クロノ・ハラオウン。
リンディの息子であり、若干十四歳で執務官として活躍する、いわゆるエリートである。

「事実上、『判決無罪』『数年間の保護観察』という結果は確実と言っているんだが、一応、受け答えはしっかり頭に入れておくように」

「そう、明日は裁判の最終日だと言っているにマイペースね・・・ん、はい」

羊羹をエイミイに渡す

「まあ、勝利確定の裁判ですから」

クロノ達は裁判の打ち合わせをしていた

「さて、じゃあ最終確認だ。被告席のフェイトは裁判長の問いにその内容通りに答えること」

「うん」

「今回はアルフも被告席に入ってもらおうから」

「分かった」

「で、僕とそのフェレットもどきは証人席、質問の回答はそこに

ある通り」

「うん、分かった・・・って、おい！」

「何だ？」

「誰がフェレットもどきだ！誰が！」

「君だが、何か？」

「そりゃ動物形態でいることも多いけど、僕にはユーノ・スクライアっていう立派な名前が！」

「ユーノ、まあ、まあ」

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃダメだよ」

「大丈夫。場を和ませる軽いジョークだ」

まだ、ユーノは怒ってる

「事実上、判決無罪。数年間の保護観察という結果は確実といっていいんだが、一応、受け答えはしっかり頭に入れておくように」

『はい』

リンディはレティと通信していた

「お疲れ様リンディ提督。予定は順調？」

「ええレティ。そっちは問題ない？」

「うん、ドッキング受け入れとアースラ整備の準備はね」

「え？」

クロノが現れ、そのことが彼の耳に入ったようだ

「こっちの方では、あんまり嬉しくない事態が起こってるのよ」

「嬉しくない事態って？」

「ロストログアよ。一級搜索指定がかかってる超危険物」

「あっ」

「いくつかの世界で痕跡が発見されてるみたいで、搜索担当班はもう大騒ぎよ」

「そう・・・」

「捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね」

「そっか」

クロノは何やら難しい顔をし出した

フェイトはなのは達の写真を見ていた

epic2 ファンタスティック・リリカル

12月2日 AM2:23 海鳴市オフィス街

「うわーっ！」

「雑魚いな。こんなんじゃ大した足しにもならないだろうけど・・・」

闇の書を掲げ、リンカーコアを強奪する

「お前らの魔力、闇の書の餌だ」

「うわーっ！」

12月2日 PM4:24 風芽丘図書館

五人の男女は解散していた。

「じゃ、また明日ね」

「うん」

「バイバイ」

ふと、一人の少女が彼女の目に留まる。今までにも何度か姿を見たことのある、車イスに乗った少女だ。必死に手を伸ばし、棚から本を取ろうとしているが、僅かに届かない。青年は見ていられなくなり、「お節介かな」と思いつつも、青年は少女の取ろうとしているであろう本を代わりに取って差し出す。

取ってあげる

「あつ」

「これかい？」

「はい。ありがとうございます」

「クスッ・・・」

「あ、私、エリ。こちらはアラタ。」

「エリさんにアラタさん。八神はやて言います」

「はやて・・・。」

「平仮名ではやて。変な名前やろ？」

「そんなことないよ！綺麗な名前だと思っよ」

「ありがとう、アラタさん」

図書館の入り口付近にシャマルがいた

「ありがとう、エリさん。ここであえよ」

「うん、それじゃ」

「お話してくれておおきに。ありがとうな」

「うん。またね、はやて」

アラタ、エリは帰っていった

「はやてちゃん、寒くないですか？」

シュートカットの金髪を揺らして車イスを押しながら、彼女の家族である女性が問い掛ける。

「うん、平気。シャマルも寒ない？」

「私は全然」

お互いに相手の身体を気に掛ける会話をする内に、もう一人の家族の姿を遙か前方に見つける。

「シグナム！」

「はい」

桃色のポニーテールを風になびかせ、悠然と立つ背の高いその女性の名を笑顔で呼ぶと、彼女もまた優しい笑顔で答えた。

「晩御飯、シグナムとシャマルは何食べたい？」

三人で並んで歩きながら、夕食のメニューについて話し合う。実に微笑ましい光景である。

「ああ、そうですね。悩めます」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか」

「そやね。そういえば、ヴィータは今日もどこかお出かけ？」

「あ、えーっと。そうですね」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていますのであまり心配はいらないですよ」

「そうか」

「でも、少し距離が離れても、私達はずっとあなたの側にいますよ」

「はい。我らはいつでもあなたの側に」

「ありがとう」

12月2日 PM 7:45 海鳴市 市街地

日が沈んだ暗い夜空を、月明かりが優しく照らしている。

静まりかえった市街地の上空に影が浮かんでいた。

「どうだ、ヴィータ。見つかりそうか？」

「いるような・・・いないような・・・」

渋めの男声で問い掛けてくる青い毛並みの狼に、赤い衣装を身につけた少女は、瞳を閉じながら曖昧な返事を返す。

「こないだっから時々出てくる、妙に巨大な魔力反応・・・あいつが捕まれば、一気に二十ページくらいはいきそうなんだけどな・・・」

閉じていた目を開き、その手に持った鉄槌を肩に掛けながら不機嫌そうに少女は呟く。

「分かれて探そう。闇の書は預ける」

「OKザフィーラ。あんたもしっかり探してよ」

「心得ている」

ザフィーラが立ち去る

その場に残った少女は、大きな瞳をつり上げ、

「行くよ。グラーフアイゼン」

鉄槌を虚空へと振り下ろし、足下に赤く輝くトライアングルを展開する。

「封鎖領域・展開」

「Magical Prison」

瞳を閉じながらの少女の言葉に、鉄槌が低い声で答え、彼女を中心に巨大な結界が展開されていく。魔力を持つ者だけを自信の領域に閉じ込めようとしているのだ。

なのはの部屋

「Caution! Emergency!」

「えっ!」

そして、結界の気配を感じ取る

「結界!?!」

「魔力反応! 大物見つけ!」

ヴィータは構えた

「行くよ! グラフアイゼン!」

「Roger」

巨大な反応を確かに感知し、ヴィータは勢いよく目を開く。片手

で鉄槌を構え、目標に向かって赤い軌跡を描きながら、最大速度で飛翔していった。

「It approaches at high speed」

「近づいてきてる。こっちに？」

なのはは現場に向かおうとする

「うん！」

なのははバラバラに砕け散った事務机にもたれかかり、目の前に迫る三つ編みの少女を焦点の定まらない眼で見つめていた。自身も相棒のレイジングハートも全身ボロボロの満身創痍である。

なんの前触れもなく襲撃してきた少女に、彼女は終始圧倒されっぱなしだった。見たこともない形態の魔法、唐突かつ爆発的に術者の魔力を増大させるデバイス。途中までは善戦したものの、結局力負けし、今いるこのオフィスに叩き付けられ、怯んだ隙にトドメの一撃を食らってしまったのだ。

かすんで見える少女の影が、携えた鉄槌を振り下ろさんとゆっくりと頭上に構えるのが見えた。

次の瞬間に自分を襲うであろう衝撃を想像し、彼女の心を恐怖が埋め尽くす。

そして、ついにその瞬間は訪れる。鋭い風切り音を従えて、鉄の塊が頭部めがけて打ち下ろされた。走馬燈のように友人達の顔が脳裏をよぎる。

（こんなので終わり？嫌だ、ユーノ君、クロノ君、フェイトちゃん

！
）

「ディフェンストームカード、天装！」

「エクスプロージョン・スカイックパワー！」

赤の戦士、ゴセイレッドは天装術”ディフェンストーム”で風の壁を作り、攻撃を防いだ。

「大丈夫？」

「あなたは？」

「仲間か？」

「君、少しやりすぎだよ！」

「なんだ？ てめーらは？」

ヴィータが、怒りをあらわに聞いてくる。

「止めにきたのよ。君が酷い事するから」

ピンク色の戦士、ゴセイピンクの言い草にヴィータの怒りが湧き上がってくる。

「どけ！ 邪魔すんな！」

ゴセイレッドが振り向いた視線の先には、黒を基調としたバリアジアケットの金髪の少女がいた。

「仲間か？」

ヴィータの声が聞こえた。しかし少女が口に出した言葉は。

「ちがう、友達」

多分、彼女が先の事件の関係者フェイト・テストロッサだなど当たりをつける。

金髪少女の後ろでは優しげな顔立ちの少年が、なのはに近づいていくのが見えた。警戒されるのもなんなので、ゴセイレッドは一声かけておくことにした。

「安心して。俺たちは敵じゃない。」

金髪の少女と少年が「なぜ？」という顔を向ける。

「それは後で説明するよ。」

「無視すんな、おめーら！」

フェイトはヴィータの方を向き、

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪ではすまない行為だ」

「あんだ、てめー。管理局の魔導師か？」

ヴィータがグラーファイゼンを構える。

「時空管理局、囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

フェイトも持っているデバイスを構えなおした。

ゴセイジャー達を蚊帳の外に置いて、ヴィータとフェイトの間で
どんどん高まっていく緊張感。

「抵抗しなければ、弁護の機会が君達にはある。同意するなら武装
を解除して」

「誰がする」

ヴィータは最後まで言い終えることができなかった。理由は遅れ
てきた騎士、ゴセイナイトが現れたからだ。それを見ていた三人も
啞然としている。

『ゴセイナイト！？』

「大丈夫か？お前たち？」

そう言っつてヴィータを見下ろすゴセイナイトに、なのは達が不思議
のような視線を向けているのは気のせいだろうか？

epic3 天使とリリカル少女

全員がゴセイナイトに気を取られていると、ヴィータは後ろを振り向かずにそのまま後退し、ビルから抜けた。

「ユーノ、なのはをお願い！」

「うん」

フェイトは後方にいるユーノになのはの事を任せると、ヴィータを追いかけるようにしてビルを抜けた。

ユーノはなのはとレイジングハートの状態を見て、内心信じられなかった。

レイジングハートは中破し、なのははバリアジャケットの上半身を破壊されている。

「正直、疑いたくなるよ。なのはをここまで追い詰めるなんて……」

「凄く強かったよ。あと……」

なのはは右手をユーノに向ける。

ぶるぶると震えていた。

「凄く怖かったんだ。わたし、あの子が怖くて途中で身体が思ったように動けなくなっただんだ」

「なのは……」

ユーノには、なのはの言いたい事が理解できた。

彼女は相手の魔法でここまで追い詰められたものではない。

相手の放つ『意』に気圧されて負けたのだ。

どんなに、なのはが才ある魔導師でもまだ成り立てでキャリアは薄すぎる。

対人戦闘の経験にいたっては数えるほどしかない。

「とにかく、回復するよ」

ユーノはなのはに向かって翡翠色の魔力光を注いだ。

なのはの外傷は消えていくが、破壊されたバリアジャケットまでは回復しなかった。

「フェイトの裁判が終わって、皆でなのはに連絡しようとしたんだ。そしたら通信は繋がらないし、局の方で調べてみたら広域結界ができてるし、だから慌てて僕達が来たんだよ」

「そっかぁ、ごめんね。ありがとう」

なのははユーノの説明を理解し、謝罪と感謝の言葉を述べた。

「なのは。僕から聞いていいかな？なのはを襲ったあの子はだれ？」

「……わかんない。急に襲ってきたの」

コーノはなのはが嘘を言っているようにも思えないし、嘘をつく理由もないので、それが真実なのだと受け止めた。

「でも、もう大丈夫。フェイトもいるしアルフもいるから」

コーノは自分のことはアピールしなかった。

「アルフさんも？」

コーノは力強い笑みで首を縦に振った。

「君、もう動けるでしょ？ 場所を変えない？」

「ウィンドライブカード、天装！！」

なのは達にそう言ってゴセイレッドは天装術”ウィンドライブ”を発動。するとビルの上に移した。

epic 4 黒と黄色

フェイトはヴィータの姿を捉えていた。

魔法陣を展開しているが、何をしようとしているかはわからない。

「バルディツシュ！」

『アークセイバー』

大きく振りかぶって三日月状の魔力刃をヴィータに向かって放つ。

「グラーフアイゼン！！」

ヴィータは左手に小型鉄球を四個出現させ、放り投げる。

『シュワルベフリーゲン』

四個同時に打ち付けて、フェイトに向けて放つ。

アークセイバーを避けて、四個はこちらに向かってくる。

（アークセイバーを防ぐ！？）

ヴィータが「障壁！」と発したのをフェイトは聞き逃さなかった。

アークセイバーは回転しながらヴィータを攻めようとするが、障壁によって完全に押さえられていた。

やがて、アークセイバーは消滅した。

「くっ!!」

フェイトは鉄球四個をどう巻くかを考えながら飛行していた。

一直線で射出されてそれで終わりというわけではないようだ。

その証拠に誘導弾のようにして、しつこくついてくる。

右へ左へと夜空を駆け回る。

（キリがない！アルフ！）

フェイトは使い魔に念話を送った。

「バリアアアアアブレイクウウウ」

陸地にいたアルフ（人型）が飛翔して、ヴィータに魔力を帯びた右正拳を放とうとする。

フェイトは追尾してくる鉄球をアルフの技で生じた魔力の余波で鉄球を粉碎させるように移動した。

目論見通り、鉄球はすべて破壊された。

ヴィータの障壁とアルフの魔力を帯びた右拳がぶつかりあって、ひしめきあっている。

ヴィータの障壁に亀裂が生じたのか、彼女は間合いを開くようにして退がる。

アルフの勝ち、といったところだろう。

（アルフ、来るよ！）

（わかってる！）

アルフに襲い掛かってくるヴィータをみて、フェイトは念話を送って注意を促す。

アルフは了承して、左手をかざしてオレンジ色の魔法陣を展開する。グラーフアイゼンを力任せに叩きつけてきたヴィータによって、アルフは魔法陣を消された上に、地上に向かって飛ばされた。

フェイトはコレを勝機と睨み、バルディッシュ（サイズモード）を振りかぶって、ヴィータと間合いを詰める。

ヴィータの足元に恐らく高速移動系の魔法とも思われる小ぶりの竜巻が生じていた。

斬りつけるが、ヴィータはあっさりと上昇して避ける。

（フェイト！あたしが足止めする！）

体勢を立て直したアルフがヴィータの足元を狙って魔法を発動する。ヴィータの足元の竜巻は消滅した。

「はあああああ」

移動速度が落ちたと判断すると、フェイトは距離を詰めてバルディッシュを振り下ろす。

グラーフアイゼンでバルディッシュを受け止めるヴィータ。

火花が飛び散りながらも、鏖迫り合い状態に持ち込まれる。

フェイトはヴィータを見る。

苦悶に満ちていたが、こちらに余裕があるわけでもなかった。

（ぶつ潰すだけなら、楽なんだけどなあ……）

バルディッシュを受け止めながらもヴィータは目当てのものを回収する事を考えていた。

相手を潰すか、自分が潰されるかの単純な勝負なら決着は簡単につけられるだろう。

（それじゃ意味がねえんだよ。魔力を持って帰らないと！）

バルディッシュを受け止めているグラーフアイゼンを見る。

（カートリッジはあと二発。やれっかあ！？）

互いにぶつかっては距離をとるという行為を繰り返していた。

フェイトが距離をとり、ヴィータが詰め寄ろうとしたときだ。

アルフが掌で展開した魔法陣を展開し、バインドでヴィータの四肢を封じたのだ。

ヴィータの四肢にはオレンジ色の輪が出現し、空に縫い付けられたようにしてその場で動きを封じた。

「うぐ、うつうつうつ」

必死でもがこうとするが、外れない。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらっよ」

バルディッシュを向けてフェイトは訊ねる。

訊ねるというよりは尋問もしくは詰問だろう。

アルフは魔法陣を閉じる。

「くうつうつうつ」

ヴィータは獣のような唸り声を上げる。

フェイトもアルフもこれで解決したと思った。

「何かヤバイよ！？フェイト！」

アルフは動物の本能のようなものが働き、主に警告した。

「え？」

フェイトの眼前に自分より遥かに身長の高い女性が現れ、バルディッシュを構えるが右手に持っている剣でバルディッシュごとフェイトを後方へと飛ばした。

「うあああああ！！」

フェイトは自分を飛ばし、ヴィータを守るようにして立つ女性を見る。

騎士甲冑の衣装に長い桃色の髪をポニーテールにし、鋭い眼光を放つ。

八神はやてと共にいた女性……シグナムだった。

「ぬおおおおお」

女性ではなく、男性の声が獣のような叫びをしながらアルフに間合いを詰めてきた。

男は右回し蹴りを放つ。

アルフは左腕で防御をするが、それでも衝撃を完全に殺す事は出来ずに蹴り飛ばされた。

シグナムはヴィータを見ず、フェイトを見ていた。

ヴィータのバインドを解くにしても、フェイトは邪魔だ。

（まずは魔導師を片付けるか）

シグナムは手にした剣を斜め上に掲げる。

「レヴァンティン。カートリッジロード！」

紫色の魔法陣を足元に展開させている。

刀身の一部分が上下にスライドして薬莢を排出させながら蒸気を噴出させる。

剣――レヴァンティンを天に掲げる。

刀身に炎が灯ってから、振りかぶる。

「紫電一閃！！はああああああ」

魔法陣から離れてフェイトへと間合いを詰める。

「――！！」

フェイトはバルディッシュで防御を取るが、レヴァンティンはそんなバルディッシュをまるでチーズのようにスッパリと斬ってしまった。

シグナムは更にもう一回、レヴァンティンを振り下ろす。

しかし、

「ディフェンストーンカード、天装――！」

石の壁を作る天装術”ディフェンストーン”によって、振り下ろされたレヴァンティンを弾く。

「危なかったな。」

「あなた達は？」

「俺達に任せて、下がってろ！」

黄色の戦士、ゴセイイエローと黒の戦士、ゴセイブラックの援護防御によってフェイトは助かった。

epic5 ゴセイジャー本局へ

結界が破壊され、海鳴市は無人の街――ゴーストタウンから人が溢れ、イルミネーションが輝く眠らない街へと戻ろうとする頃、海鳴市に一筋の光が走った。

光が消えると、ビルの屋上にいたフェイト・テストロッサ、アルフや別のビルの屋上にいた高町なのは、ユーノ・スクライア、そしてアラタ達ゴセイジャーに合流したゴセイナイトといった先程まで戦闘を繰り広げていた者達の姿はなかった。

*

次元空間の中で一際目立った建造物があつた。

外観からしてSFチックな物だと言われても言い返せないだろう。

その中では次元航行艦アースラと同等の大きさの艦や小型の運送に使われる艦など種類様々な艦が行き来していた。

発着場ではアースラはメンテナンスを受けていた。

中にはエイミィ・リミエツタやリンディ・ハラオウンと似たような格好をしている者達があちこち行き来していた。

ここは時空管理局本局である。

「なのはちゃんの検査結果ですが、なのはちゃんも怪我そのものは大したことはないようです」

「そう。それはよかったわ」

エレベーターの中でエイミィは景色を眺めていると思われるリンディに報告する。

「あと、なのはちゃんですが魔導師の魔力の源であるリンカーコアが異様なほど小さくなっているんです」

「そお。じゃあ、やっぱり一連の事件と同じ流れね」

リンディは変わりゆく景色を見ながら、状況を整理する。

「はい。間違いないみたいですわ。休暇は延期ですかね……。流れるにウチの担当になっちゃいそうですし……」

休暇を待ち望んでいたエイミィとしては残念で仕方がない。

「仕方がないわ。そういうお仕事だもの。それに……」

リンディも休暇を望んでいたわけなので、それが延期となるのは残念でならないが、自分の職業がどのようなものかわかっている以上、頭を切り替えるのは早い。

「”ゴセイジャー”？・・・達が来た理由も気になるわね」

「”ゴセイジャー”？達が来た理由ですか？」

「ああいう人達が旅行気分で来るとは思えないもの……」

エイミィはまだ休暇が延期したのを引きずっているのかため息をつ

く。

リンディはエイミィに顔を向けて、苦笑するしかなかった。

エレベーターは停まった。

「君の怪我也大した事なくてよかった」

別室でクロノはフェイトに応急処置を終えると、廊下に出ていた。

手に包帯を巻かれたフェイトもついていくように廊下に出る。

「クロノ、ごめんね。心配かけて」

「君となのはでもう慣れた。気にするな」

フェイトはその言葉にただ、笑みを浮かべるしかなかった。

「クロノ。あの人たちは？」

「彼らならなのはやユーノと同じ部屋にいるよ。行ってみるか？」

「うん！」

フェイトはクロノの案内でなのは達がいる別室へと向かった。

アラタはソファーに腰かけた。アグリ達も少し戸惑いながらも同じ

ように腰かける。

「まずは自己紹介からですね。私は高町なのはいいいます。」

なのはは軽く自己紹介した。

「俺はアグリだ」

「俺はアラタ」

「俺はハイド。」

「あたしはモネ」

「私はエリ」

5人も自己紹介した。なお、座っている順番は左から順にアグリ、ハイド、アラタ、モネ、エリの順である。アラタの正面になのはが座っている

「さっきは助けていただきありがとうございます。」

まどかは丁寧にお礼を言うとアグリは微笑みながら……

「あれは……無我夢中でやったからな。」

「あなたたちも人事じゃないですから。ある程度の説明は必要かと……」

「……その前に。一つ聞いていいか？」

「なんだい？」

ソファアーの上で座っているユーノにハイドが質問する。すると……部屋のドアが開いた。

「フェイトちゃん……」

クロノとフェイトが入ってきた。

「なのは。その……大丈夫？」

フェイトがなのはの容態を念を押して訊ねる。

「わたしはちょっとまだ変な感じ、かな」

なのははベッドから離れずに身体に纏わりつく違和感を素直にフェイトに打ち明けた。

「それに、大丈夫ならフェイトちゃんの方だよ。手、大丈夫？痛くない？」

フェイトは包帯に巻かれた手を背に隠す。

「う、うん。全然平気だよ」

フェイトは笑みを浮かべる。

アグリ達も釣られて笑みを浮かべた。

「うん。わかった。ありがとうアルフ」

ユーノはアルフと念話をしていたようだ。

「みなさん。ちょっと来てもらいたい所があるんですがいいですか？」

ユーノの申し出に室内にいる全員が頷いた。

epic 6 ストロング・レイジングハート

ユーノの案内で、なのは、ゴセイジャー、フェイトは別室へと向かっていた。

「アルフ、入るよ」

「ユーノ、準備はできてるよ。」

アルフが笑顔で迎え入れてくれ、クロノが機械の起動させていた。

「ユーノ。準備は粗方終わっている。始めてくれ」

「わかった」

クロノがその場から離れると、破損したレイジングハートとバルデイッシュが置かれていた。

短い距離なので車椅子を押して、キーボードの前に立つ。

カチャカチャカチャと叩きながら、宙に浮かぶモニターに字が並んでいく。

「破損状況は？」

クロノがユーノに訊ねる。

「正直あんまりよくない。今は自動修復をかけているけど基礎構造の修復が完了したら、一度再起動して部品交換しないと……」

「そうか……」

クロノにしてみればある意味、予測の範囲内の回答だったらしい。

「オーバーホールしないと駄目……ということか？」

ハイドの言葉にユーノは首を縦に振る。

「それだけじゃ駄目だろ。バラして直したってまたアイツ等と戦っても結果はわかりきってるぜ」

アグリの言葉にその場にいる誰もが何も言えなかった。

完全修復したとしても、勝てるか否かと言われると答えは『否』だろう。

そもそもの性能が向こうの方が上なのだから。

「パワーアップしちやえばいいんだよ！」

エリがレイジングハートとバルディッシュをなのはやフェイト同様に眺めながら言った。

「そうだね。今のところ、五分以下なんだから何とか五分五分にもちこまないと……。」

アラタもエリの言葉に賛同していた。

「でも、デバイスってパワーアップできるのかな……お兄ちゃん？」

デバイスの知識はないに等しいモネは呟く。

「そういえばさ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」

アルフが尻尾を揺らしながらユーノとクロノに訊ねる。

「何か弾丸みたいなものを使ってたな。二人とは違うスタイルだと思っっているんだが……」

ハイドは戦闘で見たことを思い出していた。

「あれは多分ベルカ式だ」

クロノが一番ありえることを口にした。

「ベルカ式？」

アルフが聞き返す。

『ベルマーク式？』

エリとモネは間違っただけで記憶した言葉で聞き返す。

「ベルカ式です」

ユーノはエリとモネに憶えてもらうためにもう一度言った。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系ですよ」

ユーノが大まかな事を告げた。

「遠距離や広範囲攻撃がある程度、度外視して対人戦闘に特化した魔法で優れた術者は『騎士』と呼ばれる」

クロノはそのスタイルについて語った。

「シグナムって言ったね」

「……あの私やエリと段違いにスタイルのいい女性のこと？」

余計な事を言うモネだった。

「うん。あの人、ベルカの騎士って言ってた」

「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装。儀式で圧縮して込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を得る……」

「俺達でいうゴセイダイナミックみたいなものだね」

アラタの解釈にユーノとクロノは頷く。

「相手もゴセイダイナミック使うんだったら厄介だな」

ハイドはカートリッジシステムをゴセイダイナミックとして受け止める事にしたようだ。

「けどよ、ずっと使えるわけじゃねえんだろ、それなら何とかなるんじゃないか？」

アグリは割と気楽だった。

「何で？お兄ちゃん」

モネが訊ねる。

「アイツ等があれ使うにはは弾丸タマがいるんだろ？つまり回数が決まってるってことじゃねえか」

『なるほどお』

クロノは目を丸くし、他の一同は感心していた。

弾丸が戦闘中にも無限に作り出されるのならば厄介な事この上ないが、それが出来ないなら弾丸使用時にのみ気をつければ大した脅威にはならないということだ。

「フェイト。そろそろいいか？面接の時間だ」

クロノはキリがいいと判断したのか、フェイトに声をかけた。

「うん」

フェイトはクロノの言葉に頷く。

「みんな。ちよつといいか？」

『？』

クロノの呼びかけに全員は、？マークを頭に浮かべる事しか出来なかった。

レイジングハートとバルディッシュを修復にかけている中、アラタ達は休憩場に設置してある自販機でジュースを買って寛いでいた。

エイミイが笑顔で全員に声をかけた。

「……ユーノ君、アルフ。レイジングハートとバルディッシュの部品、今発注してきたよ」

エイミイはウィンクして完了したという合図をとる。

「今日明日中には揃えてくれるって」

「ありがとうございます」

ユーノはエイミイの働きに感謝の言葉を述べた。

「でね、今回の事件が正式にウチの担当になったの」

エイミイは今後の方針を述べた。

「え、でもアースラは整備中じゃ……」

アルフの言う事にその場にいる誰もが気になる部分だった。

「そうなんだよね……」

エイミィもどのように対策するかはわからないようだ。

「あ、そうだ。ちょうどいい機会だから君達に聞いていいかな？」

「何をだよ？」

アグリが代表して反応する。

「君達が今回ここにきた目的を、だよ」

エイミィの言葉にゴセイジャーは顔を見合わせ、やがて決意し、ゴセイナイトが話し始めた。

目的を聞き、ユーノ、エイミィ、アルフは顔を青ざめるしかなかった。

epic7 一筋の希望？

その頃、ヴォルケンリッターはある男と対話していた。

「ヴォルケンリッター……だったな？お前たちと少し話がしたい」

ヴォルケンリッター全員が首を縦に振る。

「それで話って？」

「お前たちの主”はやて”の病気の原因は闇の書だな？」

「なぜお前が「なんでオメーが！」？」

単刀直入にシグナム、ヴィータが聞く。

「知っていたから答えになるのか。それでどうするつもりだ？」

彼の言葉に絶句する四人。

部外者である彼が知っていたら驚くのは無理ない、その男は、闇の書のことならどの誰よりも知っていると自負している。

「闇の書を完成させる」

シグナムが何かを振り切るように、はっきりと言った。おそらくは、主はやてとの約束を破る罪悪感。会議で言い争っていたのもそのことだろう。

「それで、その、”ブラジラ”さんをお願いしたいことがあるの」

シャマルが言いにくそうに切り出す。シャマルがそのお願いを言い出す前に、ブラジラのほうから切り出した。

「協力しろと？・・・それは吝^{やぶな}かではない・・・が。だが、知っているか？」

四人が怪訝そうな顔をする。

「闇の書を完成させても、お前たちの主は死ぬ」

彼の冷たい言葉は響いた。

「ざけんなっ！ 出鱈目を言いやがって！」

ダン！と両手でテーブルを叩くヴィータ。予想通りの反応である。シグナムもシャマルも驚いて声が出ない・・・。ザフィーラという狼の表情を読む芸当は出来ないが、彼も似たようなもの。一言もしやべらず距離を置いている分、冷静だと思える。

そんな彼らヴォルケンリッターに、なるべく丁寧に彼、ブラジラが知るだけのことを説明している。闇の書が元々は夜天の魔導書と呼ばれていた安全なものであること。歴代の持ち主の幾人かがプログラムを弄った事でバグを抱え込み、闇の書と呼ばれるほどの危険なものになってしまったこと。そして闇の書が完成したとき、そのバグとなったプログラムは暴走して、主の命を奪うこと。

「うそだ！ うそだ！ そんなのうそだあああああ！」

ヴィータが叫びを上げ、ボロボロと涙をこぼす。言葉とは裏腹に彼の言うことに嘘はないと感じているのだろう。

シグナム、シャルの顔も絶望に染まっている。

「…それでは、闇の書が、完成しても、主はやては……」

「はやてちゃんは…… 助からない…の？」

搾り出すように言葉をつむぐ二人。

「事実だ。受け入れる！」

闇の書を完成させるだけでは、はやては救えない。そのことは分かってもらわないと話が前に進まないと……。

「ブラジラ、何故、黙っていた？」

珍しくザフィーラが彼に問いかけてきた。

「言ったところで、お前たちに何が出来る？……くくく、」

ブラジラの冷たい言葉に、ヴィータが殴りかかってこようとするが、人型になったザフィーラが押さえ込む。

「はなせ！ ザフィーラ！ こいつ私たちを笑っていたんだ。何も知らずにいる私たちを！」

「ひどい邪推だな、鉄槌の騎士。私をそういうやつだと思っていた

のか？」

「おちつけ！！」

普段、寡黙なザフィーラの叱責。これは利いた。暴れていたヴィータがおとなしくなる。

「聞き方が悪かった。ブラジラ、主はやてを救う方法があるのなら教えてくれ。頼む」

ザフィーラが、一番冷静なようだ。普段、陰が薄い分、頼もしく感じる。

「お前たちにこの私の力を貸してやるとしよう・・・フン、」

ブラジラが指を鳴らすとどこからかコウモリのような不気味な怪物が現れた。ビービ虫である。それら6匹が闇の書へと向かう。

「あれは！？」

シグナムは突然現れた存在に驚く。ビービ虫を見てである。するとビービ虫は棒状になり闇の書に刺さる。

「何しやがった！？「見てみる！」えっ！？」

「すごいわ、半分以上も頁が埋まっている！！」

シャルが感嘆の声を上げる。

（くくく、ゴセイジャー。これで貴様たちも終わりだ！）

ソファーに偉そうに座ると、不気味に笑う。

epic8 タイムリミット・はやて

家というか八神家に戻ると、衝撃が私を襲った。しかしそれはヴォルケンリッターの四人も同じようで、なんとなく仕草がぎこちない。上機嫌なのは、はやてちゃんと翡翠だけ。

その衝撃の正体は四人のお客様。

一人は紫の髪の子、月村すずか嬢。こちらは何度か夕食をともにした仲でよく知っている。

二人目は勝気そうな金髪の少女、アリサ・バニングス嬢。こちらははやてちゃんの携帯の画像で、何度かお目にかかったことがある。実際には初対面だ。

三人目と四人目が衝撃の原因だ。栗毛の少女、高町なのは嬢と金髪ツインテールのフェイト・テストアロッサ嬢。よく知っている娘さん達なのだけど、今は微妙な立場でヴォルケンリッターの面々もどうして良いか分からないらしい。

「今日はお客さんがおるから、スキヤキや。奮発して良い肉を買ってきたで」

能天気にはしゃいでいるはやてちゃん。五人でエプロンして支度の真最中。

私、何か悪いことしたかしらね？ 思いつくようなことはない。仕方無しに予備のエプロンをして、夕食の支度に加わった。

穏やかに夕食の時間は過ぎ、なのは達を送り出そうとしたときだった。はやてちゃんが胸を押さえ苦しみだしたのは。

「はやてちゃん！ 大丈夫？」

はやてちゃんからの返事はない。それほどの苦しみ方。いつもの

はやてちゃんなら我慢してでも「大丈夫」と返すだろう。

「シャル、救急車と石田医師に連絡。いしだせんせい急いで！」

私の指示にシャルがあたふたと電話に飛びつく。

「まって、ウチのリムジンでいくわ。その方が早い。早く！」

アリサがそう叫ぶ。迷っている暇は無い。

「シグナム！」

シグナムがはやてちゃんを抱きかかえる。

「みんなは、石田医師に連絡を入れてから追いかけてきて」

リムジンはものすごいスピードで病院に向かった。

翡翠を抱いて病室から出る。はやてちゃんの病状は落ち着いていて、今はシグナムとシャル、ヴィータがついている。本人は「ちよつと、胸と手が攣つっただけ」などと言っているがちよつとだけのわけがない。

「琥珀ちゃん？」

気が付くと待合室まで来ていた。私に声をかけたのは、なのはだった。

そこにはすずかやアリサ、フェイトもいた。心配してくれていたのだろう。

「はやてちゃんは？」

すずかが訪ねてくる。

「大丈夫よ。発作が起こったらしいけど、今はけろっとしているわ。でも面会時間も過ぎているしお見舞いは明日にだって。はやてちゃんも疲れているだろうし、皆も帰った方がいいわね、こんな時間だし」

私は自分のしている腕時計を指差す、時間はすでに23時を廻っている。

すずかとアリサは使用人の人が迎えに来ており、なのはとフェイ

トにはお兄さんの恭也さんとクロノ執務官が迎えに来ていた。

私は二人に頭を下げ、クロノ執務官だけを呼び出す。

「闇の書の主の状況はこの通り、時間はもう残されていない。予定通り24日に計画を実行に移したいと思うけど。アースラのほうはどうなの？」

「こっちはいつでもいける。そちら次第だ」

「それじゃ、リンディ提督によろしく言っておいて」

「わかった。まあ、なんだ、あまり思い詰めないようにな」

心配げに言うクロノ執務官。

「心配してくれるの？　ありがとう」

これぐらいのサービスは良いかな。とクロノ執務官に微笑む。

「計画に支障が出るのを心配しているだけだ」

と言つてフェイトのところに行つてしまった。顔を赤くして言つても説得力ないわよ。まだまだね、クロノ執務官。

翡翠をシグナムに預けて、誰にも見つからないように転移魔法を使い、はやてちゃんの病室に戻った。

「うつ……うつ……」

そこには胸を押さえうずくまる、はやてちゃんの姿があつた。

「やっぱり、我慢していたのね」

「琥珀ちゃん？　なんで？」

私が急に現れたせいで我慢する余裕もないみたいだ。呼吸が荒い。

「黙つてなさい、はやて」

私が、はやてちゃんの頬を軽く手で押さえ、そのまま唇を重ねると、はやてちゃんは目を見開いて、その身体がピクンと震えた。

「ん……ん……」

はやてちゃんから声が漏れ、唇が開いたときに私は口内にあつたそれを、そのままはやてちゃんに飲み込ませる。ビックリしたのか

咳き込むはやてちゃん。

「琥珀ちゃん、なにを飲ませたん？」

でも質問には答えず。

「どう？ 痛みは引いた？」

えっ。と言う顔をするはやてちゃん。

「あれ、痛くない…… うそみたいや」

「ごめんね。驚いた？」

はやてちゃんは「うん」と頬を赤らめて頷く。

「今飲み込ませたのは、呪文を書いたお札を小さく丸めたもの。口^{くち}入^{いれ}という方法なんだけど、手持ちの魔法で一番持続効果の長い魔法なのよ。今は滅んでしまった古い魔法だけど効果は保障するわ」

「でもこれ、水とかで飲んだらダメなん？」

あはは、と乾いた笑いを立てながら、頬を掻く。実は、それでもまったく問題はない。

「はやてちゃん、辛いのか苦しいの隠すからね。お仕置きよ」

「でも、言ったらみんなに迷惑をかけてしまう」

そう言ってうなだれる。

「そういうことも言えてこそ家族だし友達よ。まあ、良いわ。明日はやてちゃんに聞いてほしいことがあるの。だから今日はもう休みなさい」

そっういい残し、私は病室を後にした

epic 8 届いて欲しい願い

ジングルベルの流れるデパートの中を、翡翠の手を引いて歩く。

「何がいいかしらね、翡翠？」

クリスマスのプレゼントを買いに来たのだけど、何を選んだら良いのやら。

と、迷っていると翡翠が私の手を引っ張る。翡翠に連れて来られたのは携帯ストラップのお店だった。そして翡翠が指差したのは、翡翠の瞳の色と同じ翡翠石を使ったストラップ。手にとって見たが翡翠石で作られたウサギや亀や鳥の細工も可愛く出来ている。

値段も手ごろなもの。私よりセンスあるのではないかしらこの子。「これは、翡翠からのクリスマスプレゼントにしましょうね」

そう言って人数分を購入。翡翠の担いでいるリュックに入れてやると翡翠は上機嫌だ。

さて、私はどうしようかしら……

午後、翡翠と一緒に、はやてちゃんのところに行くと、全員集合していた。

ヴォルケンリッターの四人とクロノ執務官、なのはにフェイト。

個室じゃなければ追い出されていたかも。

「はやてちゃん。調子はどう？」

私が聞くと笑顔で「大丈夫」と答える。まあ、一週間は、効果が持続するはずだから、問題ないはずだ。

「はやてちゃんに聞いて欲しいことがあるの。いいかな？」

「琥珀、私から話すわけには行かないか？」

切り出した私に、シグナムが待ったをかける。私としては別に構わないのでシグナムに任せることにした。

シグナムがゆつくりと口を開き、今までのことを話し始める。はやてちゃんの身体の事、闇の書の頁蒐集の事、私が示した計画の事、なのはやフェイトを傷つけた事、時空管理局も巻き込んで結構大事になっている事。

すべて話したあとシグナムは、息を吐いた。後に残るのは耳が痛くなるような静寂。普段は意識することのない院内の音がやたら大きく聞こえる。

はやてちゃんは俯いていて、その表情は読み取れない。微かに両肩が震えている。

「なんで……なんで、黙ってたん？ 皆でわたしに嘘をついていたん？」

はやてちゃんの声は泣き声だった。シグナムたちは何も言い返さなかった。あのヴィータでさえも。

「たくさんの人にも迷惑をかけて……なのはちゃんやフェイトちゃんにも怪我させて……」

「私たちは気にしていないから。はやてちゃん、気にしないで」

なのはがそう言ったが、その言葉が聞こえたかどうかあやしい。

「なんで？ そんなこと、わたしは望んでいない。そんなことされても、うれしくない。そんなことまでい」

「家族だからよ」

私は、はやてちゃんの言葉をさえぎった。それ以上はシグナム達に聞かせたくなかった。

「『なんで？』ですって、そんなの家族だからにきまっているじゃない。そんなことも分からないの？」

はやてちゃんが私のほうを見た。その瞳にはまだ涙がたまっている。

「家族だから死なせたくないの。友達だから死なせたくない。動機はそれだけで十分よ。それ以外に何か必要なの？ はやてちゃんは」
はやてちゃんは首を横に振った。

「それじゃ、何が不満なの？ 私が、シグナム達が、はやてちゃん

を裏切ったとも思った？ そうね黙っていたことは裏切りと取っても仕方ないわね。でも話していたら、はやてちゃんは どうしていた？」

シグナムが、私を止めようとする。

「琥珀、もう」

「黙っていて」

ギロリとシグナムを睨む。

「言っておくけど、はやてちゃんが反対しても、計画を実行したわよ。はやてちゃんを助けるにはそれしか方法がないから。でもそうしたら、はやてちゃんは自分のせいだと、自分自身を責めたんじゃないの？」

「……」

「他の人に迷惑をかけたくない？ ご立派ね。でも生きている以上、他人と深くかわかれれば、大なり小なり迷惑をかけているわよ。迷惑をかけてないというのは、気が付いていないだけ。それなら生きてそれを誰かに返しなさい」

私は、はやてちゃんの横に腰掛、視線を合わせる。はやてちゃんも視線を外さなかった。

「私もシグナム達も、はやてちゃんのことを諦めていない。なのはさんやフェイトさん、クロノ執務官、それだけじゃない、たくさん人がはやてちゃんを助けようと動いてくれている。はやてちゃんは どのなの？ 私たちと生きること諦める？ このまま皆が差し伸べてくれる手を拒絶する？」

そう、この計画を立てたとき、私は時空管理局との全面対決も覚悟した。でも蓋を開けてみればどうだ、損得勘定があつたとはいえず、手を差し伸べてくれた人たちがこんなにいる。

「……たい。……みんな……きたい。わたし、みんなと生きたい」
そう言つて、声を上げ幼子のように泣くはやてちゃんを胸に抱き、頭をなでる。

「いいのよ、それで」

この小さな願いくらい叶えてくれるわよ。 決行の日は聖夜ですもの。

第八話 失ったもの……そして得たもの

ハラオウン家では本日は、エイミイ・リミエッタが朝食を支度していた。

手際の高さをみて野上良太郎は驚きの声を上げた。

本日の朝食は洋食ものだ。

パンにベーコンエッグだ。

同時にエイミイの手伝い？をしているクロノ・ハラオウンを見る。

あまりの手際の悪さに良太郎はため息を吐いてしまう。

（クロノは主夫にはなれないなあ）

クロノの性格上、一生無縁な職業だと思いながらもそんなことを考えてしまう。

良太郎はソファに腰掛けて本日の新聞を広げる。

『海鳴市連続斬殺事件。これで三件目。警察の対応に疑問視』
などと大きく書かれていた。

記事の内容を読む中で良太郎は難しい表情になっていく。

この事件にはイマジンが絡んでおり、契約者の名前は楠という。

動機は今日調べて、そのまま撃退へと向かいたいところだ。

新聞を読み終えると、良太郎はテーブル席に着く。

聖祥学園の制服を着たフェイト・テストロッサとアルフ（人型）がリビングに入ってきた。

「おはよう。みんな」

「おはよー」

「「「おはよう」」」

とそれぞれ挨拶を交わす。

「エイミイさん。リンディさんは？」

ここにはいない家主のリンディ・ハラオウンの姿がまだない。

「艦長なら朝の散歩に行ったと思うよ」

「散歩？」

「寝ぼけ眼を覚ますにはちょうどいいとか言ってね。多分そろそろ帰ってくると思うよ」

「そうなんだ」

良太郎はエイミィの言葉に納得する。

それから五分後にリンディが帰宅し、全員で朝食を取った。

第十一話 闇夜の殺人鬼

伊吹が姫華のもとで暮らすことが決まった。ちょうどその頃、『財団』では城崎がスパイダーを倒された事について報告を行っていた。

城崎「正木博士の死亡は確認出来ました。しかし、息子である神代伊吹が生きています。」

???「二人とも抹殺せよとの命令だった筈だが？」

社長室のような広い部屋で椅子に座っている男が城崎に尋ねた。

城崎「も、申し訳ありません！！ですが、突然の事でした。神代伊吹がまさかあんな姿になるとは。」

???「何だと!？」

城崎の言葉に男は疑念の声を上げた。

城崎「神代 伊吹は……改造人間として蘇ったようです。しかも、仮面ライダーイスカと名乗っていました。恐らく、正木博士が改造手術を行ったものと……」

???「……仮面ライダーイスカ……」

城崎「……総裁？」

城崎は総裁と呼ばれる男に声をかけた。

総裁「城崎……貴様にサイボーグソルジャー部隊の全指揮を任せる。如何なる犠牲を払ってでも、神代 伊吹を抹殺するのだ!!」

総裁は城崎に全指揮権を委ね、イスカの抹殺を命じた。

城崎「…………ど、どうされました!? 奴はまだ改造人間になりたてです。レベル2を何体か差し向ければ倒せるのでは?」

城崎は混乱していた。総裁の突然の辞令、喜ばしい事だがそこまでする程の相手なのだろうか、神代 伊吹は。

総裁「奴の改造を行ったのが正木博士なら、奴は危険だ! 我々『財団』に害をもたらず。よいな、必ず奴を抹殺するのだ!!」

城崎「了解しました。必ず!!」

城崎は敬礼をし、部屋を後にした。

総裁「奴が本当に正木博士の作った改造人間なら、キングクリスタルを持っている筈だ。キングストーンの元となった大いなる支配者の結晶が。奴を野放しには出来ん!!」

総裁は椅子に座ったまま、拳を握りしめていた

夜………クロノス市街地の公園

タッタッタッタッタ

???「ハアハア」

一人の女性がまるで何かから逃げるように走っていた。

女性「な、なんなのよあいつ。何で私を!？」

女性は何故自分が追われるのか全く心当たりがなく、ひたすら逃げ続けた。

バツ!

女性「ヒッ!」

(このままだと、基地に被害が出ちゃう!)

芳佳に限らず、他のウィッチも機関銃でネウロイを攻撃するが、壊れた部分はすぐに再生し始める為長期戦となり、飛ぶ魔力は残しつつシールドを展開するもそれぞれに限界が来ていた。

そんなウィッチ達の焦りを悟り、落ち着かせようと坂本は声をかける。しかし、坂本自身も焦っていた。

「落ち着け宮藤、しかし、くそっ！コアが小さすぎて特定しづらい！」

ネウロイのコアにも例外はある。基本的にネウロイが大型であればそれに比例しコアも大きい。だが今回は違い、コアが小さく坂本の『魔眼』を持つてしても特定は難しい物だった。

その焦りからできた隙を、ネウロイは見逃さなかった。

バツバツバ

と優雅に、しかしキレのあるポーズをとり「ハアーツハ！」と声をあげる。

すると、オーズの背中から3対の翼を展開し空へと飛び立って行った。

残されたアंकは、何か使えそうなものは無いかと格納庫を探り始めた。

そして、その赤い何かは坂本の居た場所から少し離れた所に、坂本をお姫様抱っこして滞空していた。

「キイー！なんなんですよ！あの赤い怪人は！少佐になれなれしくして！」

「マアマア、オチツケヨ。」

「はぁー危なかった。っと、坂本さん、大丈夫ですか？」

「その声は映司か！すまん、助かった！……ところで、降ろしてくれるか。」

「あ、すいません。」

よっこらせと空中に降ろしたオーズはネウロイを見る。

「これがネウロイ……思ってたより随分大きいな。それに、あの攻撃や角見るとクワガタヤミー思い出すな。っと！」

ビームと雷がオーズと坂本を襲ってきたので、二人とも際どく避ける。

映司は両手を前に出し、少し手を引くとオーズの後ろに無数の羽根が出てきて、思い切り両手を前に突き出すとその羽根が全てネウロイ向かって飛んでいった。

少しばかりビームや雷に撃ち落とされたが、残った羽根手裏剣一つ一つの破壊力がすさまじく食らったネウロイは体中に穴が開いた。が、治癒能力はすさまじくどんどん傷口が塞がれていった。

「おおー、なんだありやすげーな！しかもあの飛ぶスピード、目指している音速に追いつきそうな勢いじゃないか！」

「あれが、火野さんの言っていたオーズですの？でも話に聞いていた赤黄緑の色じゃないんですのね。」

「流石にコアを当てるのは無理だったみたいだけどねー。」

ウィッチーズはその威力に驚いていたが、当のオーズはこの攻撃を軽いジョブ程度にしか思っておらず、この程度で倒せる相手とも思っていないかったようだ。

「話に聞いていた通り、コアってのを壊さなくちゃいけないみたいだな。」

しかし、この攻撃も無駄に終わったわけでは無く、再生するのに隙ができて坂本はコアの位置を特定に専念ができた。

「この攻撃でまだ再生が終わってない所、とすると、コアのある位置は・・・見えた！みんな、聞こえるか！コアの位置が把握できた、奴のど真ん中だ！」

「ど真ん中ですか、分かり易いですね。じゃあ、俺は止めを刺せるかどうか微妙だな。電撃やビームで威力が落ちるだろうし、とする・・・」

オーズはふと大きな得物が目に入り、あれなら行けるかとも思い近づいていく。

「よつと。確か、リーネちゃんだよね？」

「その声、やっぱり映司さんですね？！」

「そ、詳しい説明は後だけどこれがさっき言ってたオーズ。それで見たとこその銃って狙撃銃みたいだから、コアが見えるところまで外側を削るからコアを狙撃してほしいんだけど、やってくれる？」

「は、はい。やってみます！」

「それじゃ行くよ！」

「はい！」

「ま、待つてください。私も行きます！」

「芳佳ちゃん！」

「映司さん、私まだ魔力はありますから、シールドをはってある程度までなら近づけます！」

「分かった、それじゃありーネちゃんの護衛頼んだよ！」

「わ、分かりました！」

映司は無線を使って、これから大規模な攻撃をするから、少しの間

芳佳とリーネの二人以外はネウロイとの距離を安全な距離を保ってくれるよう頼んだ。

ペリーヌはまだ信用できないとかご託を並べていたが、芳佳とリーネの説得により渋々離れていく。

「よし、こっからなら!」

オーズは大きく飛翔し、ネウロイの真上を取る、まだ再生がすんでいないのか飛行するスピードはのろのろと遅い。

ベルトの左側についているオーメダルネストから、黄色と緑のメダルを取りだしベルトに入れてスキャンする

タカ!

トラ!

バッタ!

『タツツバ!タトバタ・ト・バ!』

「・・・今の歌、少しダサイ・・・」

「なんていうか、変な歌ですね・・・」

「あつはつはつは、面白い歌だな!」

「わははは、何今の歌!」

「俺も初めて聞いたときはそう思ったな、もう慣れちゃったけど・・・

・それじゃリーネちゃん、芳佳ちゃん行くよ!」

「「はい!!!」」

オーズはネウロイに落下していきながら、芳佳とリーネに指示を送りつつ、もう一度ベルトにはまったメダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ!』

すると、映司の脚がまさにバッタの脚の様に變形し目の前のネウロイに向かって、赤・黄色・緑の三つのリングが出る。

映司は、タカの複眼で坂本の言っていたど真ん中を寸分狂わずに狙いを定め『タトバキック』を放つ。

「ハアーツセイヤアアアアアー!!!」

ザシュッ!!

女性「キヤアアアアアアアアアアア」

悲鳴を上げたときには既におそく、女性は身体を切り刻まれ血まみれで倒れ込んだ。

バッタ男「ハアアアアアアアアアア」

コアを破壊するまでには至らなかったものの、表面がとても大きくえぐれ今までの大きな六角形のコアとは違い、小さな丸い形のコア

があらわになった。

「リーネちゃん今のうちに！」

芳佳が爆風からシールドで照準器を覗くリーネを守る。

「お願い・・・当たって！」

ドオン！

ガチャン、キーン！

ドオン！

ガチャン、キーン！

ドオン！

「やったね！リーネちゃん！」

「やった、やったよ！芳佳ちゃん！映司さん！」

二人は仲良く手を取り合い喜んでいる。

他のウィッチーズ達も、無茶だとか凄いキックだとワイワイとしていた。

一方オーズは

「うわぁー！やっつけた後どうするか考えて無かったー！」

マヌケな悲鳴と共に海の中へとダイブして行っただ。

オーズは体が重いので水の中で変身を解き、急いで水面へと泳いだ。水面に顔を出した映司は、ぷはーっと息をし

「すいませーん、誰か助けてくれますかー！」
と叫んだ。

「分かった、今向かうから待つてろ。ミーナ、手伝ってくれ。」
「分かったわ。それにしても映司君、結構無茶するのね。」

助けを待つ間、映司は空を見上げながらぶかぶかと浮いていた。
その時、映司のすぐ真横にぽちゃんとかが落ちてきた。

映司は思わず落ちてきた『それ』を水の中でつかんだ。

「これってまさか・・・やっぱり、クワガタのコアメダルだ。もしかしてって思ってたけど、やっぱりコアメダルがネウロイの中にあつたんだ。」

映司はキツクの時、タカの力で狙いを定めたとき微かにメダルの反応を感じたのだった。

「もしかして、このクジャクとコンドルもネウロイから出た奴なのかな。だとしたら、大体に説明がつきそうだけど、ゾウのコアメダルを取り込んだネウロイも飛ぶのかなあ。」

こうして新しくクワガタのメダルをゲットした映司は、坂本とミーナが引き上げて両肩を支えてくれた。そのまま基地に運ばれた映司は、アंकにネウロイとコアメダルの関係を話してコアメダルを全部アंकに渡し

「ハックション！」

と大きなくしゃみ一つした。みんなが笑っていたので、思わず釣ら

れて映司も笑った。

シュン！

バッタ男は女性が死んだ事を確認すると、空高く飛び上がりその場を去った。

第十二話 姫華の危機

海鳴市のどこか。

……まさかこれが原因でこんな事が起こってしまうとは……なぜ、こんな事になってしまったと彼は頭を抱えることになる。

数分前・海鳴市

「うん、いいよつと……そろそろ今日の晩飯の買い出しに行つて来ねえとな……伊吹姫華、手伝ってくれるか？」

「Amigo」の戸締まりをし、此所で買い物に行く為にそのサイトを見るのを止めて、姫華が買い物に行く……………」

「筈だったんだよな……………何がどうなってやがんだ？」

その後、玄関潜つて外に出た筈が

「しかも、伊吹姫華さんまで居なくなってるし……………」

何故か空軍の基地と同じような作りをした場所に出る。

ズドオオオオン！！

激しい揺れと同時に地面が揺れる。

レイジ達は「バッタ男」の元へと向かおうとしていた。しかし、彼は何故か足を止め…

『レ…イ……ジ君…、どこにいるの？』

レイフォンから、シャルルの声が聞こえたからだ、

「……シャルルなのか？」

『……その様子だと、君はゲートを通って”別の世界”に行っちゃったみたいだね……？』

「ゲート？別、世界？……？？？」

『とにかく……戻れるように、ゲートを開けるから、それまで少し待ってて。』

「…デコイツ！もう一丁いくぞ！-」

「はあっ！！！！？」

…少女たちは触手のような物をかわし、「バッタ男」に攻撃を加える。だが…

「…な、何よ！！これ！！？」

「腕にくつついた……！！？」

「あ………ああ」

「な……！！？何ッ！！？」

触手の様な物が次々と襲い掛かり、その攻撃に苦戦を強いられていた。

「う………うわ……ッ！！-」

「っ！！-？」

「あゝあゝあっ……！！-」

『た、ターゲット1が未確認の攻撃パターンを繰り出しました!!』

「何だと!？」

『くっそヤベエな…こいつあたしより力が強え…』

画面の前に移る未確認の攻撃に、司令部の人間たちはただ見ているだけしか出来なかった。

「フウンッ!!」

未確認が襲い掛かってくるが、少女達は素早く避ける

「ちっ…しつこいんだよ!! テメエもよ!!」

「ふん、君の武器は飾りかな？」

バッタ男は獲物を目の前にし興奮していた。何やら青の触手の様な

物を振り回している…が、

「あッ…！」

「な？な…によ…！？これ……！？」

触手の様なものから電気が流れ、喰らった少女達は倒れる。

姫華「た、助けて……助けてえ！伊吹君…！」

「くっつ…！！……うおおおー！！…！」

大型の刃が未確認に突き刺さる。

ドオオオオン！

『ターゲット1が沈黙？やった…いや、生きてるッ！？』

「こ、こいつは一体？」

『なんなの…！私、聞いてない！』

「こいつら、また何か異様なことをやり始めたらしい！」

「聞きました！先輩…！」

「ど…どうすれば……！？」

「ど…どうして…決まってるでしょう…？」

……別働第二小隊隊長である彼女達は言った。

「……とことんやるしかないじゃないの!!」

『?!』

「デコイー!!!!!!行けッ!!」

少女の叫びと共に隊員達は一斉に姫華が伊吹の名を叫び魔獣に「はいッ!」

「私たちも行くよー!」

『ソニックムーブ!!』

「あれさえ壊せば!!」

回避不能ほど、無数の触手が少女達に

自分の身体が武器の様に鋭くなっているのにも関わらず、どのように殺そうかと考えているのだろう。

「うあー!!」

「先輩!?!」

「ちいっ……こなくそ……」

捕まってしまう少女。

「逃げて・・・貴方達だけでも!!」

「諦めるのはまだ早えよ」

「え？」

その瞬間だった、ふと背後からの声がしたかと思うと次には

あのと触手が何かに撃ち抜かれた様に吹っ飛んだ。

「...先輩！お怪我は？」

「...ええ、大丈夫。けど.....ッ！」

「大丈夫か？」

「誰？」

「げぼげぼっ……何者……？」

そう小隊の2人が質問すると。仮面の男が”どこかで聞いたことのある台詞”を言い放つ。

「ただの通りすがりのメタルヒーローだ。覚えておけ……。」

「メタ……？それじゃあハッキリ言っわよ。貴方、この場から離れなさい！すごく危険だから。」

「……危ない状態なのはお前達の方だ、怪我人達を連れて、とつとこの場から退散しろ！」

『後は、僕達に任せて。さあ！』

変なスーツを着た男が現れ、何処かから聞こえる念話に小隊メンバーは唖然とした表情で立っていたのだった。

「ええっ！？」

「早く……！」

「わ、わかつたわ。」

「いいんですか？……先輩……こんな奴のいう事。」

「……彼に任せてみましょう、只者じゃないって事は見ればわかる

から。」

「てめえ、絶対許さねえ！！」

今、伊吹の怒りは爆発寸前だった。

魔獣は断末魔をあげながら爆散していったのだった。それを確認したレイジはシャルルの用意したゲート近くにあるライオットの元へと歩いていく。

「待って！君は…?!」

「さっき言っただろ！」

少女の質問を簡単に返したレイジはライオットに乗ってエンジンを掛け、その場から去っていった。

「答えになってないわ！待って！」

少女は去っていくレイジを追いかけようとするが、既に彼の姿は見えなくなっていたのだった。

第十三話 改造兵士レベル3

伊吹「いらっしゃいませえ」

姫華と暮らすことが決まり、伊吹は「Amigo」でウェイターとして働いている。姫華目当てで来店する男性客が多いため、朝からそれなりに忙しかった。

客「おはよう姫華ちゃん。今日も綺麗だねえ」

姫華「もう、おだてても何も出ませんよあ。」

姫華はニコニコしながら客の相手をしていた。

伊吹「姫華さん、モーニング上がりました。」

姫華「はあい。」

姫華は接客、伊吹は厨房で料理を作っていた。

客「姫華ちゃん、あの若い男は？」

姫華「私の高校時代の後輩で、神代 伊吹君といいます。ちょっと色々ありまして、今は家で働いてくれてるんですよ。」

客の質問に姫華は応えた。流石に一緒に住んでいる事は言わなかったが。

客「成る程なあ。良く働くじゃないか。おゝい、若いの。しっかり

姫華ちゃんを助けてやるんだぞ!!」

伊吹「はい、ありがとうございます。」

客からの激励に伊吹はしっかりと返事をした。

二人「ありがとうございますあ」

夕方になり、最後のお客を送り出し「Amigo」の一日は終了した。伊吹は閉店と同時に机に突っ伏した。

伊吹「疲れたあ」

姫華「はい、お疲れ様。アイスコーヒーよ、疲れが取れるわ。」

姫華は伊吹にアイスコーヒーを、自分はアイスティーを飲んでいた。

伊吹「あ、すいません。」

アイスコーヒーを飲み、伊吹は一日を振り返っていた。

伊吹「いやあ、結構ハードですね。姫華さんはこれを一人でやってたんだから凄いですよ。」

姫華「そうね、確かにハードかもね。でも、それだけじゃないのよ。」

伊吹「????」

姫華は「Amigo」の店内をカウンターから見渡し、伊吹に話した。

姫華「私の入れるコーヒーを楽しみにして来てくれるお客さんがいるから頑張れるの。だから、少し位の忙しさなら全然平気なのよ。」

伊吹「姫華さん……………」

伊吹は改めて、姫華の器の大きさに感心していた。

姫華「それに、伊吹君が手伝ってくれるからお客さんと話す機会も増えるしね。ありがとう、伊吹君。」

スッ

伊吹「ひ、姫華さん!？」

姫華はそつと伊吹の手に触れた。

姫華「これからもヨロシクね、伊吹君」

伊吹「はい！俺、頑張ります!!」

こうして、伊吹の「Amigo」での新しい生活が始まった。

伊吹は姫華を逃がし、バツタ男と対峙していた。

伊吹「お前、何者だ!？」

キイイイイイイイン

伊吹「!？」

伊吹はバツタ男に問い掛けた。それと同時に伊吹の頭の中で声が聞こえた。

バツタ男「……………か、……………改造兵士レベル3」

伊吹「改造兵士レベル3!？」

レベル3は精神感應で伊吹の問いに応えた。

レベル3「ガアアアアアアアアアアアア!！」

ブオン

伊吹「ツッ!！」

伊吹「変……………身!！」

ザシュツ!

ズバツ!

イスカ「ゲウツ！」

二度、三度と切り裂かれイスカはダメージを負っていった。

イスカ「クソッ、このままではまずい。どうすれば良いんだ!？」

ヒュン

イスカ「クッ!!」

「ハアッ!!」

ドガア、バゴオ

レベル3「ゲウツ！」

イスカの攻撃がレベル3にダメージを与える。

レベル3「ハアアアアアア」

ジャキイン

レベル3イスカ「そんなに倒そうだなってっグワアイスカ「!？」

、ずいぶんふざけてるんだな?」

「ハアアアア」

レベル3「ウオアアアアアアアアアア！！」

ガキイイイン

「フツ！ハアアツ！！」

魔獣は電撃を纏った触手でエクセリオンの頭部を狙い打ちしたが、あまり効いていない。

レベル3「！？」

イスカ「こ、これは！？」

イスカは驚いていた。右腕で攻撃を受け止めようとした瞬間、肘の突起物が伸びて一本の刃になっていたのだ。

バツ！

イスカ「そうか、この突起物の正体は伸縮が可能なブレードだったのか。さしずめ、ハイバイブネイルと呼ばれる爪ってところか。」

イスカ「フツ！！」

イスカは左腕の魔獣の爆撃も展開させた。

イスカがアームブレードを展開し、条件はレベル3と五分五分となった。

イスカ「さあ、いくぜ!!」

「う、うん」

「今？」

「うん」

イスカの斬撃がレベル3の頬を霞め、背後にあった木が切り倒された。

レベル3もハイバイブネイルとスパインカッターを展開し、イスカに反撃を開始した。

アームブレードとスパインカッター、そしてハイバイブネイルの攻防。二人の勝負は互角かと思われた。しかし。

イスカはブレードだけではなく、拳や蹴り技を組み合わせで闘っていた。その為、レベル3を少しずつ圧倒していった。そして。

イスカのアームブレードがレベル3の右肩を切り裂き、後方に退かせた。

「どうした、俺を責めるんじゃないのか？」

「ふ、ふ……甘く見ないで。これからだよ」

イスカ「今だ。クリスタルパワー……解放!!」

イスカはベルトの前で拳を合わせ、キングクリスタルの力を解放し

た。

イスカ「トウアー!!」

イスカ「ライダーキック!!」

レベル3「グフアアアアアアアア」

イスカのライダーキックをくらい、レベル3は苦しみ出した。

イスカ「喰らえッッ!!」

よし、そろそろ反撃といこう。

「う、うん」

腹を斬られてうずくまった仲間を見て、異形が一声叫んだ。それを聞いた他の異形の下っ端が後ずさっていく。

の首をはね飛ばした。

一つ目はコア 異形が目を見開き、後ずさりながらガタガタと震える。今さら後悔しても遅い。

「祈れ」

レベル3「……………グウウウウウウウ……………」

レベル3「!!」

イスカ「さあ、反撃開始だ!!」

イスカはアームブレードを展開し再度戦闘体制に入った。

第十四話 アイゼ vs レベル3

姫華「さあ、食べて伊吹君。今日は二人の再会を祝して私がご馳走するから。」

伊吹の腹の虫をきき、姫華はありったけの料理を用意してくれた。

肉料理や魚料理等など、とにかく種類が豊富だった。

伊吹「姫華さん、ありがとうございます。」

伊吹は姫華にお礼を言って椅子に座り、箸を手にとった。

伊吹「いったただっきまあーーーーす!!」

ガツガツバクバクモグモグ

伊吹「は~~~~美味しかったあ。ご馳走様でした!!」

パン!

伊吹は全ての料理を食べ尽くし、姫華への感謝を込め挨拶をした。

姫華「お粗末様でした。あれだけあった料理を全部綺麗に食べてくれて、作りがいがあるわあ。」

姫華は伊吹の食べっぷりに感心し、笑顔を浮かべた。

姫華「ところで、伊吹君。これからどうするの？」

伊吹「えっ？」

姫華は伊吹に今後の事をきいた。

伊吹「これからですか……………とりあえず住むところを探します。幸い、一人で生きていけるだけのお金は亡くなった父さんが残してくれてたんです。」

伊吹は少し寂しそうに言った。本当の事など言えるはずはない。自分も父も『財団』によって瀕死の重傷を負わされ、父は自分の命を救うために命を懸けて改造手術を施し、そして命を落としたのだ。

真実を姫華に伝えるわけにはいかなかった。

姫華「……………伊吹君、良かったら家に住まない？」

伊吹「へっ!？」

伊吹は素っ頓狂な声を上げた。

姫華「うん、そうしましょう。伊吹君、今日から家で暮らすこと。」

えーーーーーっ!!

伊吹の絶叫が「Amigo」内に響き渡った。

第十五話 涙と感謝

レベル3はイスカによって撃退され、城崎は闘いの一部始終を見届け姿を消した。

ブオオオオオオオオオオ

伊吹「フウ。姫華さん無事に着いたかな。」

伊吹はレベル3を退けたあと、直ぐに「Amigo」に戻った。姫華を逃がしはしたが、とても心配だったのだ。

伊吹「明かりがついてる…良かったあ、姫華さん戻ってる。」

伊吹はホッとしていた。

カランカラン

伊吹「姫華さん、大丈夫ですか!？」

姫華「伊吹君!!」

ドーーーーoooooooooooo

伊吹「げふウツ!!」

伊吹は物凄い勢いで姫華に抱きつかれた。

伊吹「ひ、姫華さん。痛いですよ。」

姫華「大丈夫、怪我してない!？」

伊吹「は、はい。大丈夫です。」

姫華は自分の事よりも、自分を助けてくれた伊吹を心配していた。

姫華「良かったあ……………本当に、無事で良かった。」

ポロポロ

姫華は感慨深まって涙を流した。

伊吹「姫華さん、心配かけてすいませんでした。」

姫華「ううん、私こそ助けてくれてありがとう。伊吹君は私のヒーローだね。」

伊吹「姫華さん……………//」

伊吹は姫華に頭を下げ謝ったが、逆に姫華にお礼を言われて少し照れていた。

伊吹「姫華さん。今後、夜に出歩く時は気をつけて下さい。また奴が現れるかもしれませんから」

姫華「そうね。でも、あのバツタみたいな人何なのかしら？」

伊吹「多分通り魔でしょう。最近、話題になってた殺人鬼かなと。」

姫華「でも、伊吹君は良く無事だったね？」

伊吹「ハハハ、全力で逃げ回りましたよ……………（闘って退けたなんて言えないよな。）姫華さん、明日はお店休みだから、俺少し出かけて来ますね。」

姫華「うん、わかった。気をつけてね」

伊吹「はい。（明日、もう一度あの場所に行ってみるか。何か奴の手がかりが掴めるかも。）」

姫華「じゃあ私は先に休むわね、お休み。」

伊吹「お休みなさい。」

姫華は自分の部屋に戻った。

第十六話 暗躍

伊吹が「Amigo」に戻り一段落した頃、戦闘が行われた公園の近くに存在する、今は無人となっている倉庫に人影が浮かび上がった。

ジャッジャッジャッジャッ

レベル3「…………グウウウウ」

イスカとの闘いで、腹部と右肩に傷を負ったレベル3が苦しみながら倉庫内に入って行った。

レベル3「ハアハアハア」

レベル3はよほど傷が痛むのか倉庫内で座り込んでしまった。

コツコツコツコツコツ

レベル3「……………フウウツツ!？」

バツ

倉庫内に響いた足音をきき、レベル3は痛みを堪えながら体を起こした。

城崎「困りますねえ、あんな騒ぎを起こされては」

倉庫内にはレベル3を追ってきた城崎がいた。

レベル3「ハアアアアア!？」

城崎「貴方は『財団』の科学班に所属している身のはずです。なのに自らの体を実験台にして、レベル3への改造……いや、創造を試

みてそのような姿になるとは。全く、科学者の好奇心とは恐ろしい
ものですね……………鬼塚 義一博士」

城崎はレベル3に変身している人物の正体を見抜き、鬼塚 義一と
呼んだ。

レベル3「……………」

城崎「ですが、理性を保てず変身しては人を殺す……………それでは意
味がありません。如何です……………その力、完全に制御してみませんか
？」

レベル3「!？」

城崎「私が総帥に貴方の再改造を頼んでみます。許可を得られれば
貴方は力を制御出来ますよ。ただし、今後は私の部下として動いて
いただきます。どうですかな!？」

城崎はレベル3に顔を近づけ、笑顔を浮かべて話続けた。

シューウウウウウウウウウ

レベル3は変身をしたとき人間の姿に戻った。そこには上半身が裸で、眼鏡をかけた男がいた。

鬼塚「……………お願い致します。城崎様」

鬼塚は城崎にたいし、深々と頭を下げて懇願した。

城崎「フフフ……良いでしょう。早速、総帥の所へ行きましょう。車を待たせてあります。あと、私に様はつけなくて良いです。普通に城崎で良いですよ。」

鬼塚「ありがとうございます。城崎さん。」

城崎「では行きましょうか」

ブウウウウウウウウウウウウ

城崎と鬼塚を乗せた車は夜の街に消えて行った。

第十七話 ISS

城崎「さあ、ここが貴方に新たな力を与えてくれる場所です。」

城崎は鬼塚と共に、とある研究施設を訪れた。そこには大量の電子機器が並び、培養液が入ったカプセル等も置かれていた。そして実際に実験を行う為の手術台もあった。

鬼塚「城崎さん、ここは一体？」

城崎「『財団』に属するサイボーグソルジャー製造工場…… ISSです。表向きは、ガンやAIDS等の不治の病を克服する為の研究を行っています。実際は私や貴方を含む改造兵士の製造を目的とした施設です。」

初めて訪れた場所に鬼塚は戸惑っていたが、城崎は淡々とISSの存在意義を話しつつづけた。

城崎「さて……貴方の再改造の件ですが、すんなりと許可が下りそうです。」

鬼塚「どうゆう事ですか!?!」

城崎「まず第一に、貴方の力を眠らせておくのが惜しいと総帥は判断されました。独断とはいえ、レベル3への改造を行った貴方の実績を買っての事でしょう。」

城崎は『財団』総帥の心情を代弁するかの様に、鬼塚の実績を称賛した。

城崎「もう一つは………仮面ライダーイスカの存在です。」

鬼塚「………仮面ライダー………イスカ!!」

グググッ!

鬼塚は、イスカに切られた右肩を握り締め怒りをあらわにしていた。

城崎「彼は非常に危険です。総帥が私に、如何なる犠牲を払ってでも彼を倒せと命令した位ですからね。」

鬼塚「……………」

城崎「ですから、貴方の再改造はサイボーグソルジャーの専門家にお願いします。さあ、行きましょう。」

コツコツコツコツコツコツ

城崎と鬼塚はISSの極秘セクションに足を運んだ。

城崎「さあ、つきました。彼女はいるでしょうか。」

プシュウ

カタカタカタカタカタカタ

???「ん、誰だい？」

研究室のドアが開くと、そこにはキーボードを叩きながら話しかけて来る女性がいた。

城崎「お久しぶりです……………マキナさん。相変わらず美しいですね。」

マキナ「久しぶりだね、城崎くん。君も元気そうじゃないか。」

マキナと呼ばれる女科学者は、妖艶な笑みを浮かべて城崎と挨拶を交わした。

第十八話 好奇心

マキナ「君がここに来るなんて珍しいね、どうしたんだい？城崎君？」

マキナは不思議そうに城崎に尋ねた。彼女は科学者、城崎は改造兵士なので所属している場所がまるで逆だからである。

城崎「貴方には是非、やって頂きたいことがあるんですよ。」

マキナ「僕にかい？」

城崎「はい。貴方にしか出来ないことです。彼の改造手術をお願いしたいのです。鬼塚博士、こちらです。」

城崎は用件をマキナに伝え、鬼塚を彼女に紹介した。

鬼塚「はじめまして、鬼塚です。お会い出来て光栄です、マキナ博士。」

鬼塚は自分と同じ科学者で、しかも免疫工学の最高権威であるマキナに出会えた事に歓喜していた。

マキナ「城崎君、彼は？」

城崎「私の部下でレベル3の改造兵士に変身する、鬼塚義一博士です。」

マキナ「えっ……レベル3！？君以外にもレベル3が存在したんだ。」

マキナは驚愕した。レベル3は未だに実用段階に至っていない為、成功例は城崎しか知らなかったからだ。

城崎「彼は自らの手で身体を改造したんです。しかし、理性を保てず殺人鬼と化していました。この力を眠らせておくのは惜しいと思い、私が総帥に頼んで彼の再改造の許可を得たんです。そこで、マキナさんをお願いしたいのです。」

城崎は鬼塚が自ら改造手術を行ったことと、彼が変身しては殺人鬼になっていた事を簡潔に話した。

マキナ「成る程……確かにレベル3への変身が可能なら、眠らせておくのは惜しいね………凄く興味深い。」

マキナは城崎以外のレベル3に非常に興味をそそられたのか。眼を輝かせ、口元には笑みを浮かべていた。

マキナ「わかった。その話、受けよう。……………とても楽しそう
だ。」

城崎「ありがとうございます、マキナさん。」

鬼塚「よ、よろしくお願いします。」

城崎はマキナに礼を言って、鬼塚は頭を下げた。

マキナ「……………フッフ、楽しみだよ……………とてもね。」

マキナはとても楽しそうに笑っていた。その笑顔からは狂気すら感じ取られた。

第十九話 誕生…狂気の男

伊吹「ここだな。俺が奴と闘った場所は。」

レベル3との戦闘から一夜明け、伊吹は戦闘が行われた公園に来ていた。そして、何か手がかりがないかと探索をしていたのだ。

伊吹「フウ、手がかりがあるかと思ったけど。何もないか……」

伊吹は公園内をグルグルと歩き回った。

ガッ

伊吹「ん、何だ!？」

歩き回るうちに、伊吹は何かを蹴った。地面に目を向けると、そこには銀色のアタッシュケースが落ちていた。

伊吹「誰かの落とし物か？」

カチャッ

伊吹はケースをあけて、中を確認した。

伊吹「白衣と、研究資料みたいだな……身分証も入ってる。」

伊吹は身分証に目を通した。

伊吹「鬼塚 義……………所属『財団』科学班……………『財団』!!」

身分証には鬼塚の名前と顔写真、そして所属の部署が記載されていた。

伊吹「昨日の戦闘の時には、俺とレベル3しかいなかった。……………まさか、この鬼塚って男がレベル3なのか?……………よし、彼に会ってみるか。この近辺だと、確か『財団』所有の研究所があったはずだ。」

伊吹はアタッシューケースを拾い上げ、バイクの後部席に固定して走り出した。

ブオオオオオオオオオ

その頃……ISS極秘セクションでは……

「ギヤアアアアアア」

ドシャツ!!

叫び声が響き渡り、レベル1戦闘員の死体は何体も床に転がっていた。

マキナ「フフフ………力を制御出来る気分はどうだい？鬼塚君」

レベル3「素晴らしいです、マキナ博士。」

変身した鬼塚は戦闘員達を実験台にして、自分の力を試していたのだった。

マキナ「君はもう力を完全に制御出来る筈だ。細胞操作で、理性を保つために額に第三の眼を造りだしたからね。君はもう以前のレベル3ではないよ。」

レベル3「ありがとうございます、博士……そして城崎さん。」

鬼塚はマキナと城崎に礼を言った。

城崎「これからは私の部下として、頑張ってくださいね。そうだ、私から貴方に新しい名前を送りましょう。貴方の名は………仮面ライダー・狂です。」

狂「……仮面ライダー・狂!」

今此処に、科学と言う名の狂気が生み出した悪の仮面ライダー……
………仮面ライダー・狂が誕生した

第二十話 遭遇

伊吹「此処だな、『財団』の配下になっている研究所……ISSは。」

伊吹は、鬼塚の紛失したアタッチケースを届けるために……そして彼の正体を確かめるためにISSにやってきた。

伊吹「よし、行くか。」

伊吹はISSのエントランスに入った。

伊吹「すみません。鬼塚博士に会いたいんですが。」

受付「どういった御用件ですか？」

伊吹「博士のアタッチケースを近くの公園で拾ったので、届けにきました。」

受付「少々お待ち下さい。」

受付の女性は、伊吹の用件を聞き鬼塚に取り次いだ。

受付「はい、わかりました。……お待たせしました。鬼塚博士はまもなくいらっしゃいます、こちらでお待ち下さい。」

伊吹「ありがとうございます。」

伊吹は鬼塚が来るまで、エントランスで待つことにした。

↓ISS地下研究施設↓

鬼塚「わかった、すぐに向かう。その人には待っていてもらってくれ。」

ガチャッ

城崎「どうしました、鬼塚君？」

鬼塚「あ、いえ。私の紛失したアタッシユケースを届けに来てくれたと連絡がありました。」

鬼塚は電話の内容を城崎に話した。

城崎「成る程、親切な方がいるものですね。」

城崎は感心しながら頷いた。

鬼塚「では、行ってきます。」

鬼塚は伊吹の待つエントランスへ向かった。

ISSエントランス

鬼塚「お待たせしました、鬼塚です。貴方ですね、私のケースを届けてくれた方は？」

伊吹「はい、神代 伊吹と言います。はじめまして。」

伊吹と鬼塚は互いに挨拶を交わした。

第二十一話 疑惑

「ISSエントランス」

伊吹「では、これを。」

鬼塚「おお、確かにこれは私のケースですね。どうもありがとうございます。」

伊吹はケースを鬼塚に渡し、鬼塚はそれを受けとった。

伊吹「いえ、たまたま見つけたので……………あの、聞きたい事があるんですが……………良いですか？」

鬼塚「はい、私に答えられる事なら」

伊吹は鬼塚に自分の抱いている疑念を語りだした。

伊吹「そのケース、近くの公園で見つけたんです。しかもその公園、最近話題になってる殺人鬼が出た場所なんですよ。まるで、獣の様な殺し方で次々と人を殺しているヤツです。……………そんな場所で、貴方のケースが見つかった……………これって偶然ですかね？」

鬼塚「さあ、ただの偶然でしょう（……………この男、まさか昨晚あの公園にいたのか！？）」

鬼塚は平静を装いながらも、内心は焦りを感じていた。

伊吹「しかもソイツは、俺の大切な人を殺そうとした……………もし、今度ヤツが現れたら……………俺は絶対にヤツを許さない……………今度は必ず、ヤツを止める……………」

ドクンッ！！

鬼塚「ツッ！何だ、右肩の傷が痛む……彼の放つ殺気に怯えてい
るようだ……」

傷を負わされた右肩を鬼塚はギュッと握りしめた。

伊吹「肩が痛むんですか？」

鬼塚「い、いえ………何でもありません。」

伊吹「おっと、長居をしすぎました………じゃあ、俺はこれで失礼
します。」

鬼塚「あ、はい。ありがとうございました。」

伊吹は鬼塚に頭を下げ、ISSを後にした。

鬼塚「……………フウ、中々鋭い所を突いて来る青年でした。」

鬼塚は安堵していたが、実際にはかなり焦りを募らせていた。

鬼塚「このままではいけませんね……………今度は、実際に貴方を狙うとしましょうか……………神代 伊吹君」

鬼塚の眼が狂気の光で満ちていた。

第二十二話 戦闘員と鬼っ子

伊吹「さあて、これで向こうはどう出てくるかな？」

鬼塚にケースを渡し、彼に少しカマをかけてみた伊吹はバイクを止めている駐車場にいた。

伊吹「とにかく、今は帰るか。姫華さんの事も心配だな。」

伊吹はバイクに乗り走り出した。

???「ターゲット、移動を開始しました。」

鬼塚「よし、追え!!」

「ケーーーーーッ!!」

鬼塚の指令をうけて、レベル1戦闘員達が伊吹の追跡を開始した。

鬼塚「さあ、どう出る？神代 伊吹」

偶然にも身長二メートル近い大男ワが地上へ降り立ち、暴れている所が立ちはだかった。

オフロードバイクに乗った上半身は裸。下半身には腰みのを履いている。アリを模したペイントされていて、いかにもどこかの原住民という感じがした。

気になる事がある。蛮刀で、長さが一・五メートルくらいあり刀身が炎にいろのだ。あいつらはヤカンか？
あんな物を持ってて、よく熱くないもんだな。

アヌビスの声が頭に響く。

「彼らはヴァンダル族。炎の民と呼ばれている。火炎を自在に操るから気をつけろ」

「わかった、それを皆に伝えてくれ。あともう一つ、全員で三角誅殺を仕掛ける様にと」

「心得た」

三百対十三なら、流水よりこっちの方がいい。きっと戦果を挙げることができるだろう。

伊吹「……何だ、お前達は？」

戦闘員「我々は、レベル1のサイボーグソルジャー部隊だ。神代伊吹……貴様を処分する!!」

戦闘員の一人が伊吹に言い放った。

伊吹「鬼塚の差し金か……遂にボクを出した訳だな。上等だ！」

先程、伊吹を処分すると言った戦闘員が驚愕の声を上げた。

伊吹「いっけええええええええええ！」

ギ
ユ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ン

真っすぐ突っ込んできたのだから横を。

自分

もう一刻の猶予もない。俺は剣の柄を握りしめ戦闘員達はマスクで顔を隠してはいるが、その仮面の下は開いた口が塞がらなかった。

なぜなら、先程その 腰を斬られて真っ二つになった彼の体が、ゆっくりと崩れ落ちていく。

伊吹は走り出した。

俺は剣を鞘に収め、周囲の蛮族たちを見回しながら叫んだ。

伊吹「さあ来い！ 全員地獄へ送ってやる！」

もう一人の男が刀を振りかざし、俺を目がけて斬りかかる。よし、高田流の奥義を見せて度肝を抜いてやるか。

戦闘員「な、なにい？真っすぐ突っ込んでくると……死ぬ気がアイツは!？」

ヴァンダル族の一人が奇声を発し、直後に住民を斬りつけた。攻撃を剣で受け止めた男性の体が、一瞬で炎に包まれる。

戦闘員たち「ぎゃああああっ!」

戦闘員達「……………な」

伊吹「俺を倒したいなら、俺に追いついて見せろ!!」

ブオオオオオオオオオオ

戦闘員「……………はっ、しまった。呆気に取られている間に逃がしてしまった。ヤツを追うぞ!」

「ケイ—————ッ!!」

今、伊吹とレベル1戦闘員達の地獄の鬼ごっこが始まった。

第二十三話 追跡劇での戦闘

一年後

「さあて、住む所どうでしょうか。」

スパイダー達との闘いを終え、伊吹は住む所を探す為に街にきていた。

街の名はクロノス……『財団』がすべての機能を管理している街で、今この世界で最も『財団』に近く、最も治安の安定した街と言われている。

伊吹「とはいっても、どうやって探すか。」

伊吹は頭を悩ませていた。

グウウウウウウウウ

伊吹「……………腹減ったな。そっぴゃ、眼を覚ましてから口々に飯喰ってないもんなあ。」

先程の音は伊吹の腹の虫だった。

伊吹「よし、まずは腹ごしらえだな。ちょうど喫茶店もあるし、行くか。」

伊吹はバイクを押しながら歩き、目の前にある「Amigo」と看板を掲げた喫茶店にバイクを止め中に入って行った。

伊吹「うーん、コーヒーの香りが最高!!」

???「いらつしゃいませえ……………ってあれ、伊吹君!？」

伊吹「姫華さん!!」

彼女の名は石動 姫華……………かつて伊吹が通っていた高校の先輩で、なにかと伊吹に世話を焼いてくれた女性だ。

姫華「久しぶりねえ。何年ぶりかしら。」

伊吹「三年ぶり位ですね、先輩は卒業と同時に就職してずっと仕事だと聞いてましたから。」

再会し、昔話をしている二人。しかし……………

グウウウウウウウウ

二人「……………」

空気の読めない伊吹の腹の虫が、そんな空気をぶち壊した。

伊吹「……………」

姫華「クスッ……………何か食べる?再会の記念に、ご馳走するわ。」

伊吹「あ、ありがとうございます。」

伊吹は照れ臭そうにお礼を言った。

第二十四話 戦闘員の憂鬱

伊吹が廃墟となったビル内にて戦闘員達を待ち受けようとしていた頃、戦闘員達は遅れてビル内に潜入した。

戦闘員1「よし、何とかヤツに追い付いたぞ！良いな、必ず神代伊吹を抹殺するのだ！！」

「ケイーーーーー！！！」

戦闘員達はビル内に潜入を開始した。

く廃墟ビル内く

戦闘員1「クソ、中々見つからん！ヤツは何処だ？何処に隠れている！？」

ドガァアァン

戦闘員1は、苛立ちから床に落ちていた一斗缶を蹴飛ばした。所
が……

ヒュン

戦闘員1「!？」

ドガァン!!

戦闘員1「グハァッ!!」

戦闘員1の蹴飛ばした一斗缶が何故か他の場所から飛んできた。

戦闘員1「クウーーーーッ……だ、誰だぁ!!」

戦闘員1の苛立ちは更に募り、ビル内にて大声をあげた。その頭にはでかいタンコブが出来ていた。

???「ハハハ、何処を見てる？」

戦闘員達「!？」

戦闘員達は、一斉に声の聞こえた所に視線を向けた。

コツコツコツコツコツコツ

ビル内に響く足音と共に、伊吹が姿を見せた。

伊吹「やっと追いついてきたか。待ってたぜ！」

戦闘員1「神代　伊吹！！さっきのは貴様がやったのか！？」

伊吹「ああ、缶が落ちる音がなかったろ？落ちる前に俺がキャッチして、お前らに向かって投げたのさ。いやあ、まさか当たるとは思わなかったぜ……………ハハハ」

そう……………伊吹は気配で戦闘員達の位置を把握していた。そこで、ちよっと戦闘員達をからかってやったのだ。

戦闘員1「貴様あ、調子に乗りやがってエ……………貴様は此処で必ず殺す！！かかれえ！！」

「ケイ……………！！」

怒り浸透の戦闘員1の号令で、他の戦闘員達は伊吹に襲い掛かってきた。

伊吹「掛かって来い!!」

伊吹も戦闘体制に入り、戦闘が開始された。

第二十五話　ダークコア……出現

＊

伊吹「ひ、姫華さん。いきなり何を言い出すんですか、それは流石にマズイでしょう。」

伊吹は姫華の提案を素直には受け入れられなかった。自分とあれば、いつ『財団』の奴らに狙われるかわからない。ましてや自分は改造人間だ。普通の暮らしなど出来る筈がない。これ以上、自分の大切な人達を失うわけにはいかないと思ったからだ。だが、そんな伊吹に姫華はこう告げた。

姫華「伊吹君、今の貴方は昔とはちがう。なんだか、大人の顔になったわ。」

伊吹「えっ？」

姫華「誉めてるわけじゃないのよ。お父さんだけじゃない、他にも何か、大切なものを失ったって顔をしてるから。」

伊吹「……………」

姫華の言う通りだった。伊吹は、人として生きる未来とその肉体を代償に、新たな命と闘う力を得たのだから。姫華はそんな伊吹の心に気付いていた。

姫華「でも、失ったものが在るなら得たものもあるはずよ。だから今は、ゆつくりと心身を休めて自分に出来ることをすれば良いじゃない？」

伊吹「姫華さん……………」

姫華の言葉が伊吹の心を包み込むように語りかけていた。彼女の言葉には人を包み込む力があるかのように。

伊吹「……………わかりました。俺、ここで暮らします。それと、この喫茶店を手伝わせてください！」

姫華「えっ？でも話を切り出したのは私だし、気にしなくても」

姫華は構わないと言おうとしたが……………

伊吹「姫華さんのコーヒー、とても美味しかったです。俺もあんなコーヒーを入れられるようになりたいんです！！」

伊吹は言葉を曲げようとはしなかった。自分を心配してくれている姫華を少しでも助けたいと思ったからだ。

姫華「わかったわ。伊吹君にはこのAmigoのウェイターをして

もらいます。うちは結構忙しいわよ。」

伊吹「大丈夫。体力と料理には自身あるんで！」

伊吹は姫華にサムズアップを見せた。

姫華「それはとても頼もしいわ。じゃ、これからヨロシクね。伊吹君。」

伊吹「はい、姫華さん！」

今日、喫茶店「Amigo」に新しいウェ이터が入ることになった。

く 廃墟のビル内く

ビル内で待ち構えていた伊吹と、それを追跡してきたレベル1戦闘員達との闘いが開始された。

戦闘員1「相手はたった一人だ、直ぐに片付けるぞ!!」

「ケイーーーーー!!」

伊吹「ならば逆に、俺が直ぐに終わらせてやるぜ!」

戦闘員達は
動きが止まっている。

伊吹ドガア

バゴン

「ギアアーーーーーッ」

グシャッ

ベシッ

の足を狙って薙ぎ払う。これで一段。股間から顔面まで斬り上げる。これで二段。一体は他の戦闘員達もこれで三段。ヴァンダル族の体を貫いて終了。以上「地摺り三段」した。ちなみに奥義ではない。地味な技だけど、結構使える。最初の一発が踏み込んでからのなのでリーチが長い上にかわされにくい。これがヒットした場合は二発目につなげ、突きや喰らって気を失っていった。同様に二発目を放つ。

戦闘員2「……っ、強い。」

戦闘員3「と……とても我々だけでは」

ガクッ!!

ジュウウウウウウウウウウウ

二体の戦闘員は泡となって消失した。

戦闘員1「お、おのれえ……たかが一人の男に此処までやられるとは……」

戦闘員1は焦りを募らせる一方だった。

鬼塚「ほう……レベル1とは言え、サイボーグソルジャーを生身で倒すとは……やはり君はただ者ではなかった。」

伊吹「鬼塚……博士!？」

拍手と共に、どこか嬉しそうに鬼塚が姿を見せた。

鬼塚「レベル1では君の相手は務まらないか。なら、私が相手だ!」

伊吹「何だと!？」

鬼塚「ハアアアアアア……変……身!!」

カアアアアアアアアアツ

伊吹「クッ!」

まばゆい光と共に、鬼塚の身体は異形のものへと変化した。

狂「ハアアアアアアア」

伊吹「その姿は!?!」

狂「私の名は、仮面ライダー狂……狂気を纏いし者だ。」

狂は伊吹に対し名乗りをあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8675u/>

天装戦隊ゴセイジャーA's ～エピックオンリリカル～

2011年11月27日09時54分発行